

藤みほ子「筥根日記」

(翻刻) 史の会

(一) 内は翻刻者注

ことし弘化二とせといふ年の夏 例ならずいとす、しきにもよほされて 筥根の温泉あみに出たつ 時はさつきつごもりがた成けり ともなふひとハ わがをしへ子なる白井香実 其母いさ子 さて従者なり

廿九日 曇りたれどしひて出た、んとす ちかきワたりの人々うまのはなむけすとて盃めぐらすほどに日たかう成ぬれば いそぎいづ 行先ハしらず けふあらかじめ思ふ二ハ

心ゆく旅にしあれば草枕むすばん夢をかしからしうるひど、いへる野ばらはるゝとさすかに心ほそしむかひにつくばねほの見ゆ 薄雲のそこはかとたどるゝよたゞならずおほゆかし

薄雲のまゆ引わたすつくば山霞にこもる春のおもかげ
雨いさ、かふりく

しきしまのみちゆく人をあはれともしらバおかミよ
雨なふらしそ

といふ二あはせてやみにけり さハ鬼神もあハれがたまふよと 心のうち二ほこるも後いかゝあらん 濱のまちといふところにしばしいこひて馬ハこゝよりかへしやる

寒河といへるうまやにちかづくころ又雨降いづ けしきばかり二てやまんとひとゝいへど たゞふりにふり来てきぬもしと、に成ぬ おかミも受ひかぬにや かうまでふらせにけることとうちつぶやけど何のかひかハあらん

希ミ河のうまやに日いと高けれどぬれつゝ、ハいかでかとしてやどりぬ けふのあらまし日記せむとて筆取るに香実もおなじ心ニや つかミじかき筆とてうづるをミて

瓊はこのみちゆきぶりの手すさびに夏めづらしき

花やつむめる

と獨ちあたるをき、つけ、ん めつらしく夏の、花もつミてまし君がこ葉をしをりにハしてと書て見す うひまなびのほどにハいといたしかし つれゝなれば題をさぐりて旅宿の夢を

むすふまもあらしのたゝく草のとははかなき露の

ふるさとの夢

香実が哥ハこゝニハもらしつ

朔日 雨いさ、かふる 馬加といへるすくに馬をやとひて

行 海づら見渡すもあめのひまハいとをかし

② たちかさねおほふ袖しのうらなミはいほへの雲の

雨さそふなり

このあたりハ袖しか浦成るべし すなとる海士のをぶね雲の上行こゝちす

波とのみ思ひし物を浮雲のうへこぎワたる

あまの釣ぶね

鷺沼ハ名のミにて白き鳥も見えず

しらさぎのミの毛とミシハそらめにて磯よりよする

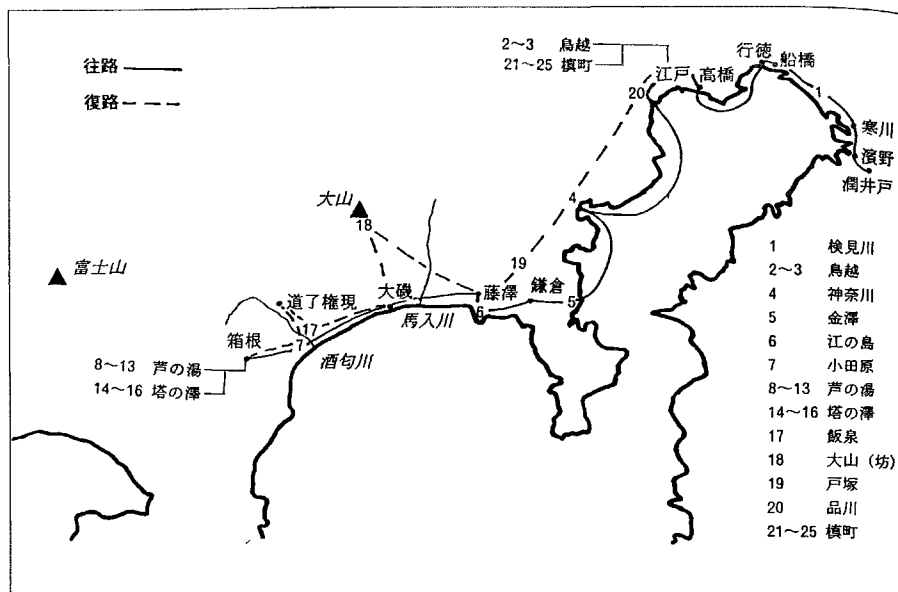
波にそありける

ふなばし二いこふ ひまありと見し雲の又覆ひ来て ひぢかさ雨とかいふらんやうに かさも取あへず ミなわぶめり

かさねてもたもとすゞしき夏ころもうたて雨さへ

ぬらしそへつゝ、

けふは時たがへていミしうすゞし からうして行徳二いたる 船二のらんとするに人あまたおしりたるはうるさしとて おのがどち四人と定めてのりぬ されどふなびとのわたくしものに跡先のかたに十人ばかりのすめり それわろしなどいはんは情なしとておきぬ しばしこぎゆくに此ころ浅瀬おほくや成ぬらん ぬさりにあさる この中二銚子の浦人二人みたり乗たるが おり立て棹さし あるハ梶



「筥根日記」行程 (数字は日程と宿泊地を示す)

取 あるハ水二入てふねおすも有 からうしてうかび行
里の童ハ きぬの裾か、げなとしてあさ瀬をたとりつ、
たハふれあそぶ

袖にかけ裳裾ぬらして河つらのわらべも水にあかぬ
みなつき

かくいふほとに ふねハ高橋にはてぬ 鳥越なるかぐミが
伯父の住ける家ニやとる 七とせばかり絶てきさきりし時
鳥の声き、つけたる いとうれし

わすられぬむかしの人を見しよりもかたらひあかぬ
ほと、きすかな

ワかためハけふ初声のほと、きす豊嶋國人
き、ふるすころ

七とせのむかしわすれずほと、ぎすワレニきけとや
声残しけむ

二日 ていけよし けふはかりハとせち二とめらるゝニ
いなびがたくてとまりぬ すみだ河に船うけて など
こそみやびこのものの、常ならめ 引かへわざおき見ニゆ
かんと人くそのかす 中村某がもとに行 ゆふづけて
家にあるしすとて いたうまたれていたる あすハ 心
ざす方に出たつべきあらましごとく 夜ふかしてけり
三日 ていけよし はこねの温泉まで足の乗物ニたすけら
れてこそとてのりぬ 袖がうらのワたりにいたるほとに

松のひとむら

うら波もいそべのまつにひき合てよはのまくらに

雨かとそきく

かなざハの入江の波はくれそめて雲に残る

ふじのしら雪

こゝを瀬とすむらむ秋の月のかげ思ひやるたニ

袖のすゝしき

又たはふれにから哥ひとつ

誰カ学瀟湘更置斯 碧波如舞山如眉

若相光景比花嬢 不讓西施醉後姿

あながま 女のさかしきハ人のにくむものぞとかや ミづ
からひそまる されど猶しりうごとといふ人あらんかし
五日 曇て 巳の時ばかりよりかつ晴かつ曇てようせずハ
雨降ぬべくミゆ 鎌倉てふ所は大戦冠鎌足の大臣まだ鎌子
ときこえけるとき この山ニ鎌ををさめ給しかバ しかよ
ぶと古き書二見えたり つるが岡の廣前いと神くし み
やしろのほとりちかく年ふる柳あり すミにけりなと よ
ませ給ひしそのカミ思ひやられてあはれなり

朽のこる柳がはらはるのかぜいくちよ経つ、吹つた

ふらん

頼朝江 此ところしり給しそのかミ いかにならぐしかり
りけんと思ふに

午ニや成ぬらん

雲はれてけふハひとへのそてがうらみるめす、しき

浪のやしほぢ

かな河のうまやに大こくや何がしにやどる 入江の波いと
静なり をりく風のすさぶハた

き、なれし山まつ風のこ、ちして夢しづかなり

海づらのやど

四日 曇りて折く雨ふる 午過るころより日影照ワたり
て暑たへがたし 金澤のけしき見んとていそぐ あづまや
二昼のものの調じさせてまづくふめり こゝもとに船よそひ
して入江こぎめくらしつ、あそぶ 岸につなぎて山にのぼ
りたちてミれハ 八つのところく 残なくミゆ かたへ
なるうばかさかしらに それの夕照くれの帰帆など いひ
をしふるもをかしう かつはをこがまし

真帆引てかへる矢はせのおもかけをうかべて見する
かなざハの海

うちワたす野嶋が崎のゆふ日かげまだしき秋の

色ぞ見えける

ひらかたや田面におつる雁かねのこゑはをぶねの

からるにそきく

あかづみる心もしらでいそくらむ磯山寺の入相のかね
もしほやくけふりと見し霧はれてのこるすさきの

くさも木もなびかしにけるいにしへのかまくら山の

松のした風

今もなほ梢にのこりてものすこし 廣前ちかく銀杏の大樹
は実朝江紙せられ給し時公堯のかくろへたる木ハいつの世
にか枯てうゑかへたる成べし それさへいくたびニか成ぬ
らん なほそのかミの木なりと古人ハいへど おのれハう
べなはず かゝるついでニをかしき所くみまほしく思へ
と おなじ心ならぬ人くなればいたづらに過行 江のし
まにいたりぬるころは ひつじニこそ成ぬらめ さぬきや
ニやどりて 吉祥天女のみやしろにハまうづ 海バラ静ニ
てそこはかとなくをかし いさ子も香実も岩室に入ぬれど
いとくろうに見てむづかしうおほゆれバ おのれハ入ら
ず とに立てまつことひさし しバラくありて人く出く
かしこ入給ハざりしぞよかりし ワれくハなかハに
して帰りにでんと思ひきと言 そハなぞと、へバ した、
る雪むづかしう いとくろうて こちこそなひつとて
いといたうわびあへり おやある人はあやふげ成ところニ
ハいらぬものぞとよ といへば 香ぐミ げにとて今ぞう
つし心ニ成て 人くわらふ
六日 天気よし このうちより見れば ひだりニふじのね
高うミゆ 雪ハかのこまだらなり
ワがためにこの花さくやひめ神の空に、ほはす

雪のふじのね

この花さくや姫の神をいはひまつるときけバ也 藤澤二いづ 馬入川ふねにてワたる 酒匂河は臺二乗物すゑつな引わたしをのこども六人にてさ、げ持てわたせバ おそろしげもなし いさ子 かぐミ ずさとハかたに引かけられてわたりぬめり かくてたそかれ二小田原ニやどる七日 ていけよし はこねの岩坂いミしうけハしきニワれもとて いさ子 かぐミも乗ぬ みちのゆくて二めでたき桜あり 花さく春べハいかならんとまづこそゆかしけれ 花の春いかに都のめうつしもおどろかるらん 葉ざくらのかけ

しのびがたけ高う見あげられたる 何ごとをしのびニけんとかし

なにごとかしのひがたげニなけけん山も思ひのある世なりけり

からだきといへるハ 雨ふれバたぎ波落 ふらねば露はかりもなしと 古人のいふをき、て

久方の空よりおつる水なれやあめふらぬ日ハ音もからたき

とほうミえたるふたご山 まぢかく成二けり

かきなどで、見まほしきかなあめつちのおふしたてけんこのふた子山

いれてすまむ

と書てとらせたれば よろこひてふところにおし入れて退く 母のあしきを人ニしらせじと心づかひするがあらはなれバ事もなげニもてなし過せど 信常のおもてけがしの人かなといミしうにく、そなる

十日 ていけよし ひとくはこねのおほ神にまうづといふ そむきがほならんもうたてあれバあながち二出たつ香実 風のこちにて湯もあミ得ずゐたるを そ、のかし いざなひ行 岩坂いとかしこし 右二見ゆるハ駒か嶽と言をき、て

たちかへりまたも尋てこまがたけ松といはねの水二契りて

曾我のはらからのおくつきどころ苔深くあはれなり

かねて身をなつの、露ニ思ひおきてけぬれと名こそ世にのこりけれ

ミづうミ晴ワたりて物すごし

箱形の山にをさむるうミなればつゆもよそ二ハもらさざるらん

ふしミの亭といへる所ニ行たれど雲か、りてあやにくなり

うちあけて箱根のうミハミせながらかくすや何そふしのしらくも

こ、にも驚時鳥かしがましきまでなきかハす

畑と言所より右の細みち二入 岩根こゝしきを このうちこもりたれと めくるめくこ、ちす のぼりに登りて声の湯二いたる 松坂や何がしがもとにかりそめニさうして落付きぬ

八日 天気よし 大江門より送り来る人くかへらんといへば いもうとのもとにふミかきてつく かへさに立やらんあましごとになん ほと、きす軒ちかうをちかへりなく ひと日二声三系にてあかざりしを 汝よ心ありけんとかし

うれしくも声のかぎりを残さじとワがためなくかやまほと、きす

玉くしげはこねふたごのそこひなくかたらひなれよ

山ほと、きす

九日 天気よし 湯あミのひまく日記す 鶯のこゑに合せて時鳥いミしうなく

うくひすのこゑもをさめぬ筥根路に又うちいづる ほと、きすかな

いさ子 例のさがなくはらだちのりて まさなきふるまひおほかり かぐミハ母のけしきをかたハらいたく心ぐるしくや思ひけん みこ、ろになかけたまひそ 罪ハおのれ二負せてゆるしたまへと 手をするがあらはれなれば

ちりまじりいさ、ながる、にこりをも心の海に

あはれしる人待つてはる夏のいろねつくせる

鳥のこゑかな

かみつふさに住てより絶てきかぬほと、きすの声あくまでき、けるがいとうれし 人ならバいざともいひてましものを

ほと、きす声せぬ里に人ならはいざともいひてつとにせましを

さるはあねはの松ならねど

十一日 同し所ニ湯あミす 銚子の浦人原半右衛門といへる人の子つとむとよびてまだいとわかきをとこ 其母刀自と共にゆあミニ来あひたり からうた作事をたしミてミやびこのむめり ワがさうしに來てかたらふ ゆふつてて むかつ尾にのぼりたちて大磯のわたり見ん いざたまへと そ、のかさる 日もかたふきぬれハもろともに登りて見る 雲のたゞずまひ こよろぎのいそぎこしかひなく

いとくちをし

そこはかとたとれどかひもなきさこぐふねだに見えぬ雲のをちかた

かへり来るほとに 日ハ西山二入はてぬ

十二日 つとむ哥書てよと せちに乞ふ この山にワか師翁の建てられし加茂の真淵翁の長哥 石ニゑりたるを摺取て つとむもて來て 是の文字万葉假名にてよみ得がたし

よミてたまへとこふ すなハちかうくとよみときき
かすれハ 悦て一ひらハワれ二あたへき ふての跡まこと
にめでたしともめでたし

十三日 ていけよし こゝもとを立て塔の澤にいたる ミ
ちのゆくて そこのいでゆのこさじと かねては思ひし
かと心ゆかでいたつらにすぐ 安房の國あまつの人とかや
むすめをゐて 先三声の湯にて物なといひたるが 又こゝ
もとに來合てよろこぶ 湯あるじハ田村何がし也 扱 其
あハの人のさうしハ山川岩切とほし流てすし

山河の水ニや秋ハすめるらむなつともいはす
音のすゞしき

むすハねどたもとす、しく成にけり岩こす水の

山がハの音

十四日 同し所ニゆあミす 天気よし

十五日 雨降風吹 けふ出た、んと思ひしに か、れハす
べなし つれ／＼のなぐさめに題を出して香実によます
ついでに

山家夏雨

あめそ、ぐ軒の雫もやま杉のこかげすゞしき

夏の庵かな

十六日 日影清ら也 こゝもとを立て 小田原にさきにや
とりし家にいこひて あるしにはかりて道了権現ニまうづ

もてなす

廿一日 折く雨ふる 鳥越ニ置つるきぬども取二つかハ
す

廿二日 ていけよし 甥の芳勝と ずさともなひて 家づ
とにすべきもの調じてんとていづ 友がきをもつてにと
ふらハんとて まづ光房がり音なふ 家ニありてたいめし
よろこぶ 年月の物語つきすべうもあらず 今宵ハこゝに
残おほかるものがたりをとせちにとゞむれど 行べきと
ころ／＼あまたなるをいかゞハせん 扇二ひら三ひらか、
せて 又のたいめをちきりおきていづ 夏蔭がりとふらひ
たれと いへ二あらでくちをし それより保孝のもとに音
なふ ゆくりなきたいめを かつおどろきかつよろこび
家こぞりてけいめいしもてなす 芳勝がとも二來るをき、
て 保孝対面せんとてこなたへよび入 何くれとこまやか
にかたらふ 妻のやほ子もたいめす ちかき頃 信君のむ
かへられたる女君にたいめす こゝにも一夜はとせちにとゞ
めらるれど あす又暁起して行べき所あれハ しひていな
ひかへる

廿三日 天気よし

沿く／＼せちニ思ふ方おほけれと かへ
さをいそけハいとあわたし

廿四日 天気よし みや子のもとにみつからとハんとかね
て思ひしかど 身ひとつにていかゞハせむと うちつぶや

る ミちのあなひがてら乗ものやとひて三人がのりぬ 飯
泉にやどる 観音の御堂あり 坂東五番の霊場とかや
十七日 曇りて風すゞし 大磯のすくに立かへりぬ 先ニ
いさ子がたつぬる事有けるを ワすれて過二けれハ 又か
くものするなり いとちひさき草の庵に 圓位上人のもた
れし杖なりとて箱よりとて、見す 長さ五尺ばかりにて
本末に節あるのみにて いともめでたき杖也 此所を鳴
立澤也といふこそ心得ね しきたつ澤の秋のゆふ暮とよま
れたるハ たゞ しぎのたつを秋の夕暮のあはれニそへて
よミし哥にて いづこの澤ニもあれ それを地名なりと心得
後の人のひがわざしたる也 いづこニもかゝるひが事ハ
あるもの也 雨降山二ハ けふ申の時斗り二のほりぬ あ
すハかならず雨ふりぬべしと 人／＼いふ さらバやかて
まうでんとて いそぎのほる げにいささか降く
雨降てふ名ニそしるけれ山つミのけしきはかりを
空にしらする
くたりて坊二いたるころ まことに雨の音はしてげり
十八日 曇てかぜふく 藤澤のすく二いづ 遊行寺二いた
り戸塚にやとる ひつじのころより照渡りて暑し
十九日 霧こめて涼し 品川ニやとる
廿日 雨降ル 已過る頃 大江門なりける横町に 年ひさ
しくすめりけるいもうとの家ニ入る 待つてけいめいし
くを芳勝がき、つけて おのれまからんと言 よくこそい
ひたれさらハかりてものせよとて いさ、け物調してつ
かハす この間ニ ところ／＼よりおこせたる たにざ
く扇やうのものかきてつかハす さて かへる契きいそぎ
に 何くれとながき日もいとみじかきこゝちす かぐミ
いさ子か けふ／＼とまつらんも心くるしければ とふべ
き方もおほかたに過して あすハ出た、んとす 初子ニ又
いつかたいめせんと思ふニ わかたれがたくおぼえて袖の
うへたゞならねど あながちにねんじて思ひたつ 芳勝
例のまめやかにゐるたちあつかひておくりす
藤 みほ子
しるす

著者頭註

① 露(ママ)「露」か(雨雷を司る神なり)

② 此あたり袖しの浦也

③ 六帖ニひちかき雨とよめる哥 もとハ万葉集の哥を誤
りたるにて 久方の雨もふらぬか そをよしにせんと有
しを 其ひさをひぢにあやまりかたをかさ二あやまりし
なり

④ 和名抄ニ船砂ニツキテ不行ヲゐさると言トアリ

⑤ 品川(海) 袖が浦

⑥金澤八景

⑦実朝江 年へたる□が岡への柳ハらすミにけりな春のしるしに

⑧信常ハいさ子が夫也

⑨キエノ反ケなり

⑩阿禰ハの松 古歌ニ くりハらの阿ねハの松の人なら

ハミヤこのつとにいざといハせしを

⑪奥州栗原郡 姉ハの松

⑫大磯のあたりの海ハこよろぎの磯也 催馬楽ニ こよ

ろぎのいそめかりあげニ言なり

⑬山つミハ山を司る神

⑭岡本保孝 清水光房 前田夏蔭そ友がきなり

史料解説

ここに収録した史料は、慶應義塾図書館所蔵『筈根日記 并鹿野の山ふみ』より『筈根日記』について全文を翻刻したものである。原史料は縦二四・六、横一七・〇、厚〇・七cmの和綴本で、史料名の示す通り『筈根日記』と『鹿野の山ふみ』の二つの異なる内容の著作からなっている。しかし双方には、紙質、紙色、墨色に相異が見られ、また当初の綴穴跡の位置も異なることから、本来はそれぞれ独立していた著作を後に一つに綴じ合わせた様子がうかがわれる。けれども双方の筆跡は同一で、表紙の題簽の文字も同じ手であることから、この二つの著作を書写した人物によって現在の形に合本されたと推定される。

また『筈根日記』には、朱墨で頭註、傍註、読点が入書入れられていて、これらの筆跡も本文と同一である。頭註では、古典からの引用語句や難解な用語、あるいは地名などについて、読者の理解を助けるための懇切丁寧な説明が加えられている。これに対して傍註は、描写されている対象の状況や具体的な内容など、むしろ本文の補足的な説明が中心となっている。そして、読点は煩わしいほど多く書込まれ、一つずつの語句と文節を読み取りやすく明確に示している。

このような懇切丁寧な頭註や煩わしいほどの読点は、こ

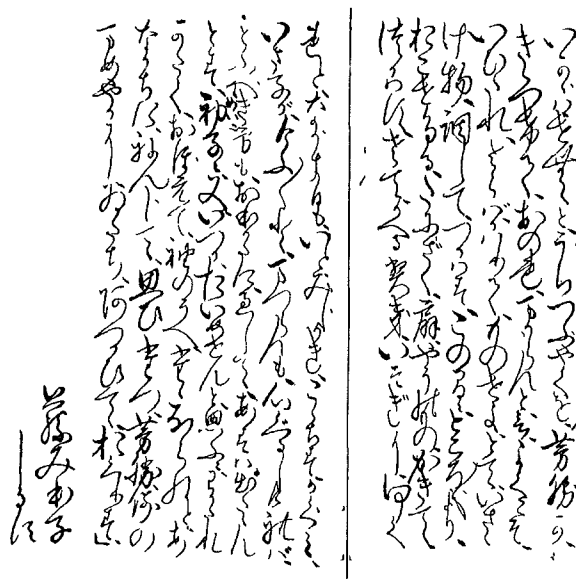
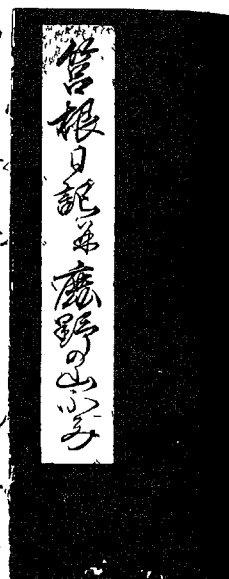


図1 「筈根日記并鹿野の山ふみ」慶應義塾図書館所蔵

れらを書入れた人物の熱心な教育者としての姿と、実際にこの日記を咄んで含めるように教えられながら読み進めて行った弟子の存在を想像させる。また傍註には、「^外とに立て」「このうち」「^多そこらのいでゆ」等の、原著者自身にしか分らない事実が数多く含まれている。さらに、本文全体と頭註、傍註すべてに共通するのは、手本を写したとは思えない滑らかな筆勢と独得の個性的な書法である。以上のような特徴は、この史料が、弟子を同道して旅をした原著者自身による原本であると解釈することができる可能性を示しているとさえ言えないであろうか。

ところでこの『筈根日記并鹿野の山ふみ』の著者については、慶應義塾図書館の蔵書目録においても『国書総目録』においても、「伊藤みほ子」となっている。しかし、これは以下に記したように、本史料に記されている著者名の「藤」のくずし字を「い藤」と読んでしまった誤りがそのまま伝えられて来たためであると考えられる。

「史の会」がこの史料を知ったのは、稲村喜勢子の『はこね日記』（本誌第九号参照）の調査を行っていた時である。現地調査のために訪れた箱根町立郷土資料館で提供された同館発行の『湯の道』関係資料調査報告書（一九九七年）に本史料が紹介されていた。私たちの関心を引いたのは、題名に含まれている「鹿野の山」という地名と「み

ほ子」という著者名、そして「著者と教え子」という『宮根日記』解説文の中の記述であった。

「鹿野の山」とは房総半島の鹿野山のことであり、稲村喜勢子の師である「藤みほ子」が晩年をその山麓で過した山である。喜勢子の『はこね日記』は天保十三年の旅で本史料の三年前にあたり、その折に同行者と別れ特別に詣でた飯泉の寺へ、みほ子も案内を頼み訪れて一泊している。また本史料の『鹿野の山ふみ』には、著者と数名の同行者との山踏みの様子が生き生きと描写されているが、その中の重要な人物として「きせ子」が登場する。そればかりではなく、この山踏みそのものが「かねてきせ子がそのかす鹿野の山ふみせん」として出かけたものであった。これ

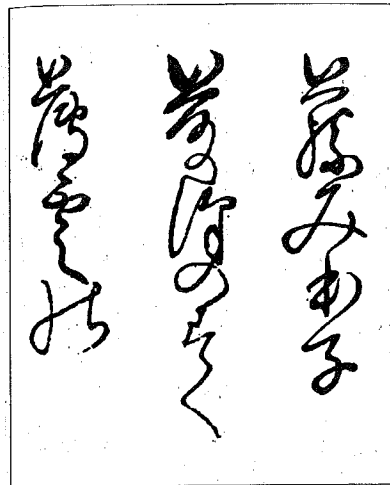


図2 右「藤みほ子」
中「藤澤のすく」
左「薄雲の」

らの事実から、本史料の著者とされている「伊藤みほ子」は「藤みほ子」であると解釈することができないのではないであろうか。

さらにこの解釈を裏付けるのは、「い藤」と読まれてきた文字が実は「藤」のくずし字であると立証できることである。『宮根日記』本文の「六日」は、藤澤から小田原への行程が記述されている。この藤澤の「藤」と、この日記の最後に記されている著者名の最初の文字とを比較してみると、草冠の書き方が明らかに一致し、著者名は「藤みほ子」と読むべきであることが分る。また、旅の初日「廿九日」に、筑波山にたなびく「薄雲」の様子を記述している箇所があるが、その「薄」の草冠も同じように書かれている。(図2)

女子学習院編『女流著作解題』(昭和十四年)や田辺弥太郎『房総歌人伝』(昭和三十三年)などによれば、藤みほ子は房総の各地に多くの弟子を持つ歌人で、その著書として『有明物語』が知られ、遺草集に『萩の花妻』がある。そして享年七十六歳(一八六五年頃)で鹿野山麓に没したこと以外には、ほとんどその生涯については知られていない。本史料を原著者自身の手になる原本とし、さらにその著者を稲村喜勢子の師である「藤みほ子」と同定するには未だ論拠となる調査は不十分である。しかし、このささや

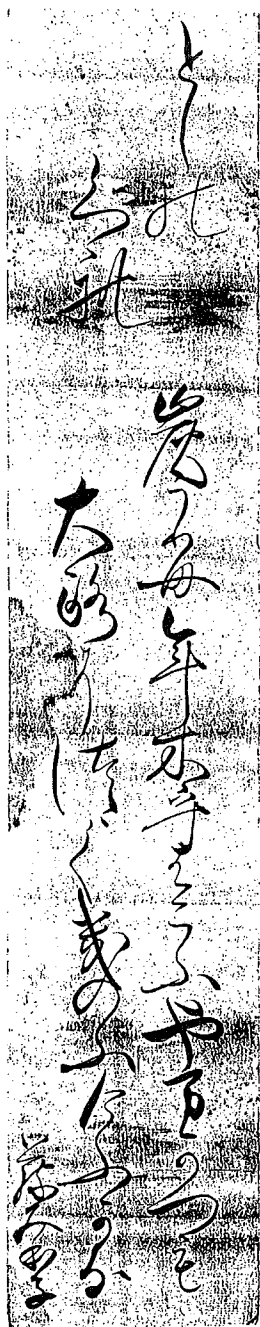


図3 藤みほ子短冊(柴桂子氏所蔵)

としの 炭うりも年木をはこぶやまかつも
くれ 大路につくきのふけふかな

藤みほ子

かな報告を端緒として、彼女の著作の一つに『宮根日記并鹿野の山ふみ』を付加えることができるようになることすれば、史の会一同にとってこの上ない喜びである。藤みほ子について、また彼女と稲村喜勢子との関係については、さらに今後の課題として調査を続けなければならないと考えている。

本史料の調査研究に便宜を図り、翻刻と写真掲載をご許可下さいました慶應義塾図書館、翻刻にあたり様々なご助言を賜りました関勝利様に心より感謝申し上げます。

(長谷川郁子)

「追記」本稿を寄稿した後に、柴桂子さんから藤みほ子の短冊が見つかり入手されたことを教えて頂いた。本史料と短冊の文字を比較すると、ほぼ同じ手であるように思われるが、詳細な比較検討は稿を改めて行いたい。(図3)

「翻刻」池田洋子、木暮雅子、五味寛子 長谷川郁子、武藤博子
「ワープロ入力」佐藤育子 「地図作成」木暮雅子

〒二六二一〇〇三三

千葉市花見川区幕張本郷二二六六六一〇四 佐藤方
電話/ファックス 〇四三一七二七一三三五八